

**特集****手ざわりある情報技術の使い方**

すでにあちこちで言われ尽くされていることだが、近年の情報技術が進歩するスピードは目覚ましく、私たちの生活のなかにも知らず知らずのうちに、しかし急速に、入り込んできている。日常生活や社会システムの効率化あるいは利便性の向上を図ることによって、これまでは困難だと思われていた課題が解決できると、大きな期待が寄せられている。

しかし、総論でも述べられているように、急激なスピードで開発が進み、その動向に注目が集まっている AI 技術であっても、得意な作業と得意ではない作業があるように、情報技術は、決して社会の万能薬となるわけではない。加えて、どのように情報技術を利用するのかといった目的や用途、そして、どのような点をメリットと感じて情報技術を利用していくのかといった点は、当然ながら、それらを用いる場面ごとに異なり、実用化するには事前に十分な議論が必要となる。現在、情報技術の活用も含む、デジタル化の推進が政府の重要政策として掲げられているが、実際に私たちの暮らしはどのように変化していくのだろうか。

本特集では、くらしのなかの様々な場面において、情報技術を利用する際にどのような試行錯誤がなされているのかを

紹介したい。はじめに、くらしや社会活動の基本ともいえる人々のコミュニケーションが、情報技術の利用や普及によってどのように変わっていくのかを名古屋大学・久木田准教授に語っていただいた。次いで、具体的な取り組み例として、地域生協における電話注文受付、震災・原発事故からの復興と持続的な農業の再建、行政による保育所の入所選考、そして、大学生協食堂におけるレジ業務という場面をとりあげ、情報技術の利用可能性がどのように検討されているのかを取材した。いずれの取り組みからも、どのような作業を情報技術に置き換えることができるのか、また、どのような作業は依然として人間が担う必要があるのかを具体的に知ることができる。加えて、情報技術を実用化していくうえで直面する課題や悩みは決して少なくなく、現場の方々の工夫や苦悩もうかがえる。

それぞれのとりくみから、くらしに情報技術を導入していく上での現在の到達点や立ち位置を確認するとともに、私たちの身の回りではすでにどのような変化が起こっているのかについても、意識をはらってみたい。

(本研究所研究員 山野 薫)